

堀  
辰雄

ほととぎす





ほゆゆか

われぞげにとけて寐<sup>ね</sup>らめやほととぎす  
ものおもひまさりこゑとなるらん

蜻蛉日記

## その一

「昔、殿のお通いになつていらした源みなもとの宰相さいししよう某なにがしとか申された殿の御女むすめの腹に、お美しい女君が一人いらつしやるそうでございます。その女君なんぞをお引き取りになられては、如何なものでございましょう？　なんでも今は、お二人共しようち、兄せうに当られる禅師ぜんじの君の御世話しむせになられ、志賀しがの麓ふもとに大層心細いお暮らしをなすつ

て入らっしやるそうでございますが……」

やっと春の立ち返ったある日、そんなことを不意に思  
い出したように年とった女房の一人が、私の前で話し出  
した。そう、そう言えば、そんな御方のことも聞いてい  
たっけ……と私は以前殿にそういう女の御方もあられた  
ことなど、もうほとんど忘れかけようとしていたのを、  
何んということもなしに思い出させられた。——なんで  
も故陽成院（ようじよういん）の御後だとか云われる、その宰相がお亡（な）く  
なりになって、跡にたった一人の御女（むすめ）ばかりがお残さ  
れになった時、そう云うことをお聞きになるとそのまま

にはお聞き過ぎしになれない例の御性分から、殿はその御方を何くれとなくお世話なすっていらしたようだったが（一度などは私のところからもあるたけの単衣ひとえをその御方のもとへお取り寄せになったこともあった——）、そのうちその不為ふしあわ合せな御方は、御自分の本意ほんいからでもなく、ときおり殿をお通わせになさっていられるらしい御様子だった。昔気質の人らしく、それに殿よりも少し年上だったりしたので、それまでだ**いぶお躊躇ためら**いなすつたらしかったが、やはり何かと行末が心細くお思いなされていた折でもあろうし、そう頼もしそうにもない殿を

もお頼みになるより外はなかつたのかと思えば、かえつてお気の毒なようなくらいであつた。しかし、殿との御仲は、おそらくその御方のお思いなすつたのよりも、ずっと果敢はかないものにちがひなかつた。——その後一年と立たないうちに、その御方のところに女の御子様がお生まれになつたとか云うことを耳にして、ある日私がそれをそれとなく殿にお訊きすると、「そう、そんなこともあつたかも知れんな」と殿はいかにも冷淡そうにおっしゃられたぎりだつた。私の前なのでわざとそう素知らぬふりをして入らつしやるばかりでもなさそうだつた。そし



て「どうだ、ひとつお前がその子を引き取って育ててやらないか？」などといつも子の少いのを歎いていた私にかえって挑いどまれるようにおっしやられるのを、私は胸を刺されるような思いで聞いていたことも、今、ひよつくりと思ひ出す。しかし、そんな一昔前の自分と言ったら、ただもう自分の不為合せなことばっかしで胸を一ぱいにしていて、自分のほかにもそんなお傷いたわしい御方さえいらっしやることなんぞ、知らずにいられたら知らずにいたいくらいだった。……

そういう一人よがりな私であったのに、それがこの頃、

身も心も衰え出しているとしても云うのか、ときおり見る夢までが妙に気になってならないほどで、行末なども何かと心もとなくて、自分が死んだ跡には道綱みちつなだけがただ一人ぎり頼りなく残されることを思うと気がかりでならなかった。数年このかた物もの詣もうでなどするにつけてもどうかもう一人ぐらい女の子でもお授け下さるようにとお祈りし続けていたが、だんだんそんな望も絶えた年頃になり、もうこの上はどこからか賤いやしくない腹の女の子でも引き取って、それを養うよりほかはあるまいなどと、誰れかれにともなく私はそんなことを言い言いしていたの

だった。……

——私は、おそらく殿なんぞにももう忘れられているかも知れないような、その不遇な少女を自分が引き取つてもいいようなことを言うと、私にその話をした女房はすぐ伝<sup>つて</sup>手を求めて問い合わせてくれたが、その日かげの花のように誰にも知られずにこっそりと大きくなった少女はもう十二三ぐらいになっているそうだった。そんないたいけな子だけを相手に、その不為合せな御方は、志賀の東の麓に、近江<sup>おうみ</sup>の湖を前に見、志賀の山を後ろにした、寂しい里に、言いようもなく心細く明し暮らして入

らっしやるとかいうことだった。その二人のお身の上をつぶさに聞けば聞くほど、何か私も身につまされて、そう云うお暮らしではさぞその御方もこの世に思いの残るようなことばかりであろうと思いやられるのだった。

その人の異腹の兄だという、その禪師ぜじの君はいま京に住まっておられた。その禪師の君と、その話を持ち出した女房とが昵近じっきんの仲だったのである。で、すぐその禪師の君に話をしに往って来てくれたが、「それは何よりなことです。早速志賀の里へ往って、お話をして参りましょう。どうも世の中があまりに果敢はかないようなので、いつそのこ

と尼にでもさせようかと思つて、あちらへ遣つてあつたのですから——」と云うところよい返事だつた。それから二三日後、その禅師の君は志賀の山を越えて往つてくださつた。たまにしか訪れることのない、そんな異腹の兄がそうやって突然訪れていったのを、その世を侘びた女は何事かと訝いぶかしそうにしていたが、その話を切りだすと、はじめのうちは黙つて聞いて、なんとも言わずにただ泣いてばかりいたけれど、ようやく口を開いてこう云う返事をした。「わたくしはもうこれぎりの身と思ひ、自分のことなんぞはとうから諦めておりますが、ただ一

しよにしよにいるこの娘がこのままではあんまり不便ふびんで、なんとかしよ為様はあるまいかと思っております。まあ、そうおっしゃってくださる御方がおありなれば、どうぞあなた様のよいようにお極めなすって下さいまし……」——  
そう云うその人の御返事だったということをし、その翌日京へ帰った禅師の君から聞いて、その女房は私のところへ来て、一部始終を繰り返し、「本当に好うございましたこと。そう云う御宿縁でもございましたのでしよう。が、何よりもまあ、そのお気の毒な御方のところへ、御文ふみをあなた様から早速差し上げなさるなければ——」と言

うのだった。私も先ずそうしたいと思っ  
ていたところだったから、その日の夕ぐれ、その志賀の御方のところへ  
最初の消息を認したためた。「かねがねよりあなた様の御ん  
事はお聞き及びしておりましたが、これまではついぞ御  
消息も差し上げませんでした。突然、こういう私のよう  
な者からこんな無躰ぶしつけなことを申し出されて、まことに思  
いがけなく思し召されたでもありません。禅師  
様がわたくしの日頃よりの心細い憂えをそこもとへお伝  
えなさいましたのを心よく御承引うけひき下さいました由、ほ  
んとうに心から嬉しゅうございました。何かと遠慮いた

されまするかかる申し出<sup>いで</sup>ゆえ、ずいぶん躊躇もいたしましたけれども、いろいろとそちらの御様子などお聞きいたし、もしやそんなおいとしい御子様をもお手放しなされはすまいかと思いましたが、ものでございますので——」などと心を入れて認めたのであった。

御返事は翌日来た。長い御消息だった。養女の件は「喜んで」などといかにも心よい返事をして下すったが、その同じ御消息の中に、以前殿とおかたらいになられた日頃のことなんぞを何かと思ひ出されて細々<sup>こまごま</sup>と書かれてあった。自分なんぞの想像以上に不為合せであられたらし



いお身の上には、何かと胸を打たれるようなことのみ多いのだった。「いつのまにやら目の前を霞かすみが一ぱい立ちこめましたようで、筆の立所たちどころもわかりませず、たいへん見苦しい字になったようでごさいますけれど——」と最後を結ばれてあるのも、いかにもその御方らしい真実な感じがあるように思えた。

それから二度ばかりその御方と長い消息をとりかわし、とうとうその少女をわたくしの養女とすることになったので、また禅師ぜんじの君が出向いて往かれて、その少女を志賀の里からともかくも京へ連れて来られたのだっ

た。

そのことを聞くと、自分の愛まなむすめ娘をそうして京へ出立させて、いよいよ寂しくなられたその御方のお心の中はまあどんなであろうかと、それからそれへと尽きせずお思いやりしていたが、「それにしても、あんなに気弱そうな御方をこのように決心させたのも、もしかしたら殿がその女を御世話くださるようなことにでもなりはしないかと思われなすったからかも知れない。そう思っただらしたら、私なんぞのところへお寄こしになつたって、殿はこの頃こちらへもあまりお見えにならない

ものを「などと、こうしていつまでも殿との仲を絶とうとしては絶たれずに中途半端な暮らし方をしている意気地のない自分のことが反省せられ、こう云う自分とも知らないで托せられて来るその少女までがかわいそうな気もしたが、それもいまさら詮せんないこと、一旦いったんこうと契つた上はもはや取り返すことは出来ないと思われるのだつた。

この十九日が日が良いというので、道綱にその少女を迎えに往って貰うことにした。出来るだけ目立たぬようにと、ただ、網代車あじろぐるまの小ざっぱりとしたのを用意させて、

それに馬に乗った男どもを四人、下人げにんを数人だけ附添にした。やがて道綱は、自分の車のうしろにこんどの仲人役の女房を載のせて、出かけて往くことになった。

ちようど皆の出かけようとしている所へ、殿から珍らしくも御文があつた。何だかこちらへ入らっしやりそうな御様子にも見えるので、きよう殿にいきなりその養女を見られてはしようがない、まあしばらくは知られないようにして、なりゆきに任せて置いた方が好いと思うものだから、出来るだけ急いで連れもどるようにと皆に言いつけた。

しかしそうやって急がせた甲斐もなく、それより殿が一足先きに来てしまわれた。まあ、どうしようかしらと思惑っているうちに、やがて皆も帰って来たようだった。殿は少し不審そうにしていらしたが、道綱が、狩衣姿ではいつて来るのをお認めになると、「大夫はどこへ行っていたのだ？」とお訊きになった。道綱は、さも困ったような様子で、何かと苦しそうに言い紛らしていた。私は側からそれを見るに見かねて、いずれ一度は殿にも打ち明けなければならぬことなのだからと思つて、「実は、私どもの身よりが少くて、あまり心細うございました

たので、ある御方に棄てられました子を貰って参ったのでございます」と言葉のうらに少し皮肉を籠こめながら言  
った。

「それは見たいな」と殿はしかし上機嫌そうにおっしや  
って、それからふと私の顔を見据えるように「一体、誰  
の子なのだい？」と小声になって訊かれたが、私が相変  
らず笑っているような、いないような目つきをしている  
のにやっとお気がつきになると、急に御自分も目を赫かがや  
かせられながら、「だが、まさかおれがもう年を取った  
ので、代りに若い奴を手に入れて、おれなんぞは追い出

そうと言うのじやあるまいなあ」と言われた。

「御目にかけてもよろしゅうございますが——」と私もそれについて釣込まれてほほ笑み出しながら、「——でも、御子様にして下さいますか？」

「いいとも。そうしようではないか。——だが、まあ、どんな奴だか早く見せてくれ」殿はいかにも好奇心をおさえがたそうに急<sup>せ</sup>かせられた。私も私で、まだ一目も見ないその少女が見たくて溜<sup>たま</sup>らなかつたので、すぐにこちらへ来るようにと呼びに遣<sup>や</sup>らせた。

その少女は十二三と聞いていたが、その年にしては思

つたよりも小さくて、まだいかにも子供子供していた。近くへ呼び寄せて、「立って御覧」と言うのと、素直にすぐ立って見せたが、身丈みのたけは四尺ぐらいで、いかにも姿のよい子で、顔なども本当に可哀らしかった。ただ、髪だけは、幼少の折からの辛苦がそこにまざまざと見られでもするかのようになり、だいぶ抜け落ちて、先きの方が削そがれたようになってい、身丈には四寸ばかりも足りなかった。

そういう穉いとけない少女を殿はつくづくと見入っていらつしつたが、「可哀らしい子じゃないか。一体、誰の子な



のだ？」とあらためて私の顔を見据えられた。

「本当にお可哀いとお思いなされますか？」と私は言いながら、「では、お明かししてもよろしゅうございますけれど——」と静かにほほ笑んでいた。

殿はとうとうこらえ兼ねたように言われた。「早く教えてくれ」

「まあ、おうるさいこと」私は急にすげなさそうに言った。「まだお分かりになりませんか？　あなたの御子様ではありませんか」

「何、おれの子だって？」殿は側で見ているのもお気の

毒なくらい、おあわてなすった。「それはどういふのだ、どこのだ？」

私はしかし、相変らず、冷やかにほほ笑んでいるぎりだった。

「いつかお前に貰ってやらないかと言った、あの子か？」殿はそれを半ば御自分に向って問われるように問われた。

「さあ、その御子様かも知れませんが……」

殿は、そういう私には構わず、一層しげしげとその少女を見入られていた。「やはりあいつらしい。——だが、

あいつがこんなに大きくなっているようななどは夢にも思わなかったことだ。いまごろどこをうらぶれていることだろうか、ときおり急に気になり出すと、もう矢も楯も溜らないくらいだったけど……」そう云う御声はだんだん震え出してさえいられた。

少女はそこに泣き伏していた。それを見ていた側近の者どもも、そんな物語にでも出て来そうな奇くすしい邂逅かいこうには泣かされない者はいないらしかった。——そういう裡うちでも私だけは、まるで涙ももう涸かれてしまったとでも云うように、そしてそんな自分自身をも冷やかに笑っている

るより外はないかのように見えた。

やがて、殿が何度となく単衣ひとえの袖を引き出されては御目を拭われていらっしやるのを、私は珍らしい物でも見るようにそのまま眺めていたが、それからやっと言った。

「もうお歩行あるきのついでにもお立ち寄りにならなくなったような私なんぞの所へ、こんなに可哀らしい子が参りましたけれど、これからはどう遊ばします？」

しばらく殿はなんともお返事なさらずにいた。が、ようやく顔をお上げになった時は、もういつものように私に挑むいどように目を赫かがやかせていらした。そして殿は「い

っそのことおれのところへ連れて往こう。——なあ、小さいの」と言いながら、少女の方へふり向かれた。少女はどうしてよいか分からず、いかにも当惑しきったように、しかし顔だけはあでやかにほほ笑んで見せていた。……

翌朝、殿は少女をまたお呼び寄せになって、髪などをしきりに撫でておられた。そうしてお帰りぎわに、「さあ、これからおれの所へ一しよに往くんだよ。いま、車をこちらへ寄せさすから、そうしたらさっさとお乗り」などとそんな小さな子にまでからか揶揄われていらした。少

女はただもう困ったように袖を顔にしていた。殿はそういう少女の可憐かれんな様子を、心残りそうにかえり見られがちに、帰って往かれた。

それから御文を寄こされるたびごとに、端にきまつて「撫子はどうしているか」などとお書き添えになられるのだった。「山賤やまがつの垣は荒るとも」などという古歌を思い出されてか、そんな撫子なでしこなんぞとあわれな名をいつのまにかお附けになっていられるのも、本当に心憎いほどなお思いやりだこと。あいにくそれから殿も御物忌ものいみつづき、こちらとぎも何かと物忌がちで、ほとんど門も鎖とぎした

ぎりなものだから、入らっしやろうにも入らっしやれず、  
そういう御文を毎日のように、門の下から差し入れさせ  
て往かれるのも、それだけでもまあ大層なお心變りのよ  
うに見える。

それから十数日ばかり立ったある日の未ひつじの刻頃、「殿  
がお見えです」と言い騒いで、俄かに中門を押し開けな  
どしているところへ、車ぐるまごとお這はい入りになつて来られた。

車の傍に男共が数人寄つていつて、轆ながえをおさえなが  
ら、簾みすをまき上げると、中から殿はお降りになられて、

いきなり「綺麗だなあ」とおっしやりながら、いまを盛りと咲いている紅梅こうばいを見上げ見上げ、その下を徐しずかにお歩きになって入らした。

そしていつになく上機嫌そうにして入らしたが、あいにくあすは方かたふさが塞りふさになっていることを申し上げると、「そんならそうと、なぜ先に知らせて置いてくれなかった」といかに不満そうにおっしやられた。「もしそうお知らせして置きましたら、どうなさいました？」と私はつい言わなくともいいのに言いかえした。「むろん方かたち違えをして来たさ」と殿も殿で、あんまり見え透いたよう



なことをおっしやるものだから、こんどは私も少しばかり気色を顔に出して、「それほどのお気持がおりなさいますかどうか、今後に試<sup>た</sup>めさせていただきます」と応じた。

そんな小さなことから、またいつものように不和が高<sup>こう</sup>じそうになって来たので、殿はすこし気むずかしい顔をなすっていられたが、やがてこないだの少女が呼ばれて来ると、やっとまた上機嫌になられて、側にお呼び寄せになり、髪などを撫でられながら、「この子には手習や歌なんぞよく仕込んでやってくれ。そういうことは、お

前になら任せて置けるからな。——まあ、もうすこうししたら、向うの家の奴なんぞと一しよに裳着もぎの祝をしてやろうよ」などと愉たのしそうに御相手をせられていた。そのうち日が暮れ出したので、「おなじことなら院へ参ろう」と言い出され、また皆を騒がせて車にお乗りになり、帰って往かれた。

殿をお見送りした後、一人ぎりになって、私はそのままいつまでもその暮れようとしている庭面にわもをぼんやりと見入っていた。一種言うに言われないほどの好い匂が、ときおりその夕闇のなかに立って、それがまだ鶯うぐいすなん

ぞを寐つかせないでいるらしい。西の対<sup>たい</sup>あたりから、それ<sup>まじ</sup>に雑<sup>まじ</sup>って、つい今しがた少女の習い出したらしい琴<sup>こと</sup>の幼い調べが途絶えがちに聴えて来る。——私はふとこんな美しい春の夕をさえあの御方はまあ山里にお一人でどうして入らっしゃるだろうかと思いやった。あたりのいかにも充ち足りたような、懶<sup>ものう</sup>いくらいの、和<sup>なご</sup>やかさが、かえってそういう悲しみの多い人のお気の毒な身の上を、その一々の悲しみをまで、残酷なほど鮮<sup>あざや</sup>かに、生<sup>いきいき</sup>々と私に描かせていた……

この春は、祭や物もの詣もつでなどにその少女が珍らしがって往きたそうにしているので、そう若いものばかりだけを出してやることも出来ないのです、私も連れ立って一しよに出かけることもつい多かったです。

しかしまた春の末からは何かと物忌が重なり、家に閉じ籠こもりがちだったけれど、去年までは家の柱などに御守札などを押し付けてあつたりするのを目に入れると、この夢ほども惜しいと思われぬ生をさも惜しんでいるかのような気がされて、自分らしくないことだと心苦しかったが、今年はどういうものか、そう云う厄除やくよけのよ

うなものすら無関心に見過ごされ、何事もないように静かに忌いみにこもっていられるようになった。それもこの少女のために気が紛れるのかと思つて、私は毎日のようにその少女を相手に歌を詠よんだり、手習をさせたりしていた。

殿もこの頃は物忌がちなので、お泊りになることは少ないが、よく昼間などお見えになる。そんな昼なんぞ、もう自分の老いかかった姿を見られるのは羞はずかしいようだが、どうにも為し様がようないので、少女を自分の側から離さぬようにして物語のお相手などしているが、いつも

派手<sup>はで</sup>好みで、匂うような桜がさねの、綾<sup>あやもよう</sup>模様<sup>よう</sup>のこぼれそ  
うなくらいなのを着付けていらっしやる殿<sup>むか</sup>に對<sup>むか</sup>っている  
と、いまさらのように自分の打ちとけて、萎<sup>しお</sup>たれたよう  
ななりをした姿がかえり見られ、可哀いさかりのこの撫  
子のために、こうしてわざわざ入らっしやればこそ、さ  
ぞ自分は殿には見とうもなく思われたろうと悔<sup>く</sup>やまれが  
ちだった。

葵<sup>あおいまつり</sup>祭<sup>まつり</sup>が近づいた。その日になると、私は若い人たち  
を連れて、忍んで出掛けていった。しばらく祭の行列を  
見物しているうちに、なかでも一きわ花やかに先払いさ

せながらやってくる御車があつたので、どなたかしらと思つて注意をして見ていると、その前駆の者どものなかに幾人も見馴れた顔があつた。「やつぱり、殿だ」と思ひながらも、自分たちの車のまわりで「あれはどなた様でしようか……いままでの中でも一番御立派なようだ……」などと人々がざわめいているのをそれとなく耳に入れてみると、こうして忍んだ姿で来ている自分たちが一層みすぼらしいような気がされてきてならなかつた。簾みすをすつかり捲まき上げられたまま、きらびやかにお通り過ぎになつて往かれたが、車上の人はまぎれようも

なく、あの方だった。——が、まあ何ということか、あの方はすぐ目の前をお通り過ぎになられながら、その瞬間私たちの車をお認めになられたかと思うと、ふいと扇で顔をお隠しになられて、そのままそこを通り過ぎて往かれてしまったのだった。

車の奥ぶかくに自分と一しよにいた撫子にもそれは気がついたにちがいがなかった。私がそれについては何んとも言わずに黙っていると、少女も心もち蒼いあおような顔をしながら、しかし車上の殿なんぞは見もしなかったような風をしていた。その少し蒼ざめた顔色は、家に帰るま



で、直らなかつた……

夕方、そんなことが知らず識らずの裡うちに帰りを早めた私たちの車よりか、ずっと遅くなってから、道綱の車が帰ってきた。

なんでもその祭の帰りぎわ、混雑をきわめた知足院ちそくいんのあたりで道綱の車は一台の小ざっぱりとした女車のうしろに続き出したので、そのままその跡を離れぬようにして附けて往くと、向うでもそれに気がついたらしく、家を知らせまいとするのであろうか、ずんずん車を早めて他の車の間に紛れ込もうとするのを、とうとう最後まで

附けて往つて、その女の家（大和守の女やまとのかみだとか……）

をつきとめて来たとか云う話だった。——その小さな冒険は、内氣一方に見える道綱にも少からず氣に入つたらしかつた。そうしてその跡を附けて往つた車の若い女のことを、その姿を見もしないのに、何んとなく懐しく思い初めているように見えた。

あくる日になつて、何を思われたか、殿から御文を寄こされた。しかし、きのうの出会いには一切お触れになつていなかった。私はその返事の端にすこし拗すねたように、「きのうは大層まばゆいばかりのお出立いでだちだったと皆が申

しておりますが、どうして私たちにだけはお見せ下さ  
なかつたのですか。本当に若々しいなされ方でしたこと  
と書いてやったら、すぐ折り返し、「あれはおれの姿が  
老いぼれていて羞はずかしさのあまりにしたことなのだ。そ  
れをまた、けばけばしい姿なんぞと誰が言っているのか」  
などと書いて来られたが、よくもまあそんな空々そらそらしいこ  
とがおっしやれたもの。

そんな葵祭が過ぎてから、殿はまたかき絶えたように  
入らっしやらなくなった。

道綱は、この頃、しきりに例の大和守の女むすめのもとへ文をやつては、内気な子だから、女の方の返事の思わしくないのを、一人でもどかしく思っているらしい。私にはまだ何も打ち明けてくれないので、こちらにも何も言わずに見ているよりしようがない。日ねもす何か憂わしげな様子で庭面にわもなど眺めながら暮らしているかと思うと、次ぎの日は小弓の遊びなどに出かけて往つて、きようは上手に射たなどと帰つて来るなりその日の模様をはしやいで皆に話したりするのだった。

撫子なでしこの方はまた撫子で、ようやく世の中と言うものが

分かりかけて来た少女らしく、あれから何か私に気を置いて、つとめて顔をさえ見合わせないようにしている。

小さい心に過ぎていろいろ思っていることもあろうかと、いたいたしいようなくらい。——私はもうこのまま殿がいつお絶えになろうとも、自分自身は思い残すようなこともあまりあるまいと思われたが、ただ、こうしていろいろな夢をいだいて私のところにやって来たでもあろう撫子がまあどんなに胸の潰れるつぶような思いをするかどうかと、そのことのみが気づかわれるのだった。

もう梅雨つゆちかいそんなある日、突然殿があ祭の日か

らはじめてお見えになられた。私が空けた<sup>うつ</sup>ような顔ばかりして、いつまでも物を言わずにいると、「どうして何も言わないのだ」と、殿は私の機嫌をとるように言い出された。「何も言うことがございませんので——」と私が思わず生返事をすると、殿は急にこらえ兼ねられたようにお声を荒らげて、「どうしてお前は、来てくれない、憎い、悔やしいと、おれを打つなり抓<sup>つね</sup>るなりしないのだ」などとお言い続けになった。私はしばらく打ち伏したまま無言で聞いていたが、稍<sup>やや</sup>たってから、やっと顔をもたげ、「わたくしの方で実は申し上げたかったことを、そ

のように何もかも御自分でおっしやられてしまいましたので、もう私の申し上げたいことはなくなりまして」と言いながら、私はいつか自分がいかにも気味よげにほほ笑みだしているのを感じていた。

その日はそうやって一日中、二人とも、むつつりとし合ったままで対<sup>むか</sup>い合っていた。殿は撫子を呼びにやられたが、撫子までがきようは気分が悪いと言ってとうとう出て来なかった。殿はますます苦々しげな御顔をなすつて入らしったが、それでも何かがお心残りのようにすぐにはお立ちにもならず、日暮れ近く、ようやくお帰りに

なつて往かれた。

しばらくこの日記を附けずにいた。みずから進んでそれを附けたいような気にもならず、また、それを附けずにいることが気にもならなかつたので、そのまま放つておいたのである。もともと、ながらく途絶えていたこの日記を再び何んと云うこともなしにこの頃附けはじめていたのは、前のように自分で自分を何んとかしななければならぬと言つた、切迫した気持なんぞからではなかつた。ただ、あれほど自分のことだけでぎりぎり一ぱいに



なっていた私が、こうしてあの方に棄てられた女の子を養うような余裕のある心もちにまでなり出したのが自分にも不思議なくらいで、それで筆をとり出したのだが、やっぱり、この日記を私に書かせたものは、あの方への、また、自分自身への一種の意地であったかも知れぬ。しかし、そういう気もちもだんだんなくなりかかっている現在、その日記がこうして終るともなく終ろうとしているのも当然であるのだろう。この日記にいつかまた別の弾はずんだ心で向えるような日の来るまで、しばらくそれを仕舞っておくため、私はいま、この物憂い筆をとってい

ると言えようか。

ここ数日、雲のたたずまいが陰しく、雨が思い出したように降ったり歇やんだりするような日が続いている。この頃はよく明け方なんぞに時ほととぎす鳥が啼いているらしく、女房の一人が「ゆうべ聞いた」などと言うと、他の女房がすぐそれに応じて「けさも啼いていた」などと話し合っているが、人もあろうに、この私がまだこの夏は一度もそれを聞かないなんぞと言うのは羞はずかしいような気がするほど。——それほど、この頃はとう云うものかわれにもなくぐっすりと寐てばかりいる自分をかえり見て、

私は皆の前では何も言わずにいたけれど、心のうちではひそかに「自分はいくらぐっすり寐ていたって、本当に打ち解けて寐ているわけではないのだ。おそらくこの頃私自身にさえ見向きもされなくなってしまった私の物思いが、毎夜のように自分の裡うちから抜け出して、時鳥となり、あちらこちらを啼き渡っているのだろう」などと考え考え、そんな負けず嫌いな気もちを歌によんだりして、纔わずかに悶を遣やっていた。しかし、それを誰に見せようでもなく、私はそこいらの紙に書き散らしては、それがそのまま失うせるもよいと思っていた。……

## その二

もう一年余も披ひらかなかったこの日記を取り出して、それにまだこう云う気もちではついぞこれまで向ったこともないようにさえ見える、心ときめきを感じながら、いま、夜の更けるのも私は知らずにいる。自分にとって付けても付けなくとも好いようなものになりかかっていたこの日記を、再びこんな切ない心もちで手にとることがあるとは、夢にも思わなかつたことである。

頭の君がお立ち去りになって往かれたのは、もう余程前のことであろう。その跡、私はながいこと、灯をそむけたまま、薄暗いなかに、ひとり目をつむっていた。いつまでもそうしながら、自分でも何をとははつきりと分らないようなものを考えで追いつけていた。そしてその自分でもはつきりとは分からないもののために自分の心が切ないほど揺らいでいるのを、私もまた切なくそれを揺らぐがままにさせていた。……

しばらくしてから、私は観念したように閉じていた目をやっと思ひらき、出来るだけ心を落着けるようにして、

自分の前にこの日記を置いた。

一生受領ずりようだった父が私のためにいろいろと気づかってくれて、私たちをいまの中川のほとりの住居に移らせて下すったのは、去年の秋の半ば頃だった。殿が私のためにあてがって下すっていた、これまでの家はますます荒れ放題に荒れてきて、もう住みがたいばかりになっているとは言え、父の勧告に従ってその家を去ってしまえば、同時に殿との間もこちらから絶やすも同様になるので、最近わざわざ志賀の里から引きとったばかりの養女のこ

となど考え、さすがにそれを自分ひとりでは決し兼ねて、まあそう言えば殿の方でどうお出でになるだろうかと、それとなくその移居のことをほのめかすように殿にお伝えして置いたのだった。けれども、殿からはその事については何んとも御返事がないばかりか、この頃は例の近江おうみとかいう女のもとへばかりしげしげお通いになって入らっしゃると云うお噂を耳にしたので、私はいよいよもうこれまでと思い、殿にはなんともお断りせず、父の言うとおりに中川の家に移ったのだった。大層山近く、河原かわらに沿うた、ささやかな家で、本当にこんなところに

こそ住すまいたいと年頃思っていたような住いであつた。

——そこへ移つてからなお二三日は、殿はまだそれをお知りになつた様子もなかつた。ようやく五六日立つてから、「どうしておれに知らせてくれなかつたのだ」と御文を申し訣わけのように寄こされた。「お知らせいたそうかとも思いましたが、こちらはあんまり片寄つた処もとでございませうので。本当に、せめてもう一度なりと、旧の処もとでお会いいたしとうございました」と私が氣強くすつかりもう仲の絶えたようにして返事を差し上げると、殿の方でもお怒りになつたかのように、「そうか、そんな不便



な処ではおれには往かれそうもない」と言つて寄こされ  
たぎりだった。それからそのまま、私たちはとうとう仲  
が絶えた形になった。

九月、十月とたち、早朝などしとみ薮を上げて見出すと、  
川霧が一めんに立ちこめていて、山々は麓すら見えない  
ようなこともあった。それほど寂しい、それほどわび侘しい  
住居に自分自身を見出すのが、私にはせめてもの気休め  
になった。その川を前にして果てしもなく拡がっている  
田の面もには、ところどころに稲束いなたばが刈り干されていた。  
たまたま私たちのもとを訪れて来るような人でもある

と、その青稲をそのまま馬に飼ってやっているのも、いかにもあわれが深かった。小鷹狩こたかがりが好きなので、ときおり野へ出ては鷹を舞い上がらせたりしているものの、こんなところでもって一緒に暮らすようになった道綱は、まだ若いだけ、何んだかすべてが物足らなさそうに見えた。

そのままやがて冬になろうという頃、こちらではもうすっかり仲の絶えた気でいた殿のもとから、突然、冬の着物を使いの者に持って来させて、これを仕立ててくれなどと言って来られた。「御文ふみもありましたが、途中で

落して来てしまいました」と使いの者がしきりに言い訣をしていたが、最初からそんなものはお持たせにならないかったのだろうと思われた。私はもう意地を立てとおす気もなく、言われるなりにそれを仕立てて、こちらからも文を附けずに送って差し上げた。その後、そんなことが二度も三度も続いてあった。なかなか仲が絶えそうでは絶えないのが気になったが、それもまあこんな縫物ぐらいのためではと、私たちの果敢<sup>はか</sup>なかつた仲がいまさらのよう<sup>は</sup>に思い返されたりしているうちに、その年も暮れたのだった。

ながいこと大夫たいふの位より昇進しなかつた道綱が、よううまのすけやく右馬助に叙せられたのは、その翌年の除目じもくの折だつた。殿からも珍らしくお喜びの御文を下さつたりした。今度の昇進はよつぽど道綱も嬉しいと見え、いそいそとしてそこそこ御礼まわりなどに歩いていたが、その寮つかさ（右馬寮）の長官がちょうど道綱には叔父にあたる御方なので、そこへもある日お伺いすると、まだお若いその御方は非常によろこ歡ばれて、よもやまな物語の末、どこからお聞きになつて知っていらしたのか、私の手もとになでしこ養っている撫子なでしこのことを何くれとなくお問いになり、「御

いくつになられましたか？」などと熱心に訊かれたそうだった。帰って来てから、道綱が私にそのことを話して聞かせたが、私は「まあ、いくらお好色な方だって、こんな撫子を御覧になったら——」と答えたぎり、なんとも気にはとめなかった。

撫子は去年志賀の里から私のもとに引き取られてきた頃から見れば、だいぶ大人寂びた美しさも具え出して来てはいる。そして幼少の折からいろいろ苦労をして来たせいか、年の割には世の中のこととは何もかも分かるようで、私の前なんぞでは山里に一人侘しく暮らしている母

のことなどを少しも恋しそうにはしないくらい、——だが、からだ身体つきなどはまだ細々としていて、全体にどことなく子供子供している。初事ういごとなどはまだ遠そうである。

——そういう誰の目にもつきそうもない小さな草花のよう<sub>う</sub>に生い立っているこの少女を、まあその御方はどこからお聞きつけになつて、もうそれに御目をかけられようとして<sub>う</sub>いるのだらう。……

右馬頭うまのかみはその寮つかさで道綱にお出合いなさると、話のついでにかならず撫子について同じようなことを繰り返す

お尋ねになるらしかった。最初は道綱も気になると見え、逐一それを報告していたが、私の方で一向取り合おうとしなかったもので、しまいにはもう私には何も聞かせないようになった。ところが、ある日、夜更けてから帰って来るなり、もう私の寐<sup>ね</sup>ているところへ這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>ってきて、「実はきょうお父<sup>ちち</sup>う様にお目にかかりましたら、お前の寮の頭<sup>かみ</sup>がこの頃おれをしきりに責めるのだが、お前のところの撫子はどうしているな、もうだいたいぶ大きくなっただろう、などとおっしゃっております。それから寮で、頭<sup>かん</sup>の君にお逢いしましたら、殿から何かそなたに仰せにはなり

ませんでしたか、と訊かれたので、その通りにお答えしますと、頭の君はそれをどうお取りになられたのか、それでは明後日が好い日だから御文を差し上げたい、などと私に言われるのです。私は何んとも御返事いたさずに参りましたが——」と生真面目な道綱はさも困ったことになってしまったようにそれを話すのだった。私はそれを一通り聞くと、「まあ本当に何を勘ちがいなすって入らっしゃるのでしょね。まだ撫子がこんなに小さいとは御存知ないからなのでしょよ」などと事もなげに返事をして、心配そうな道綱を去らせた。そうして私もそ



の夜はそのまま寐た。

さて、その日になると、やっぱり、頭の君から御文があつた。「日頃からわたくしの思つておりますことを殿にお頼みいたしておきましたが——」などと丁寧に書いて、殿からそちらへ自分で文を差し上げよと言われましたので、こうやって消息を認したためましたと言つて来たのだつた。私はそれを受け取つて、まあ頭の君も撫子がこんなに穉いことがお分りになりさえすればと、おかしいくらいに思つて、さしあたり返事はどうしようかと迷つていたが、いっそのことこの手紙を殿のところに持た

せてやって何んとおっしやるか聞いて来させようと思つた。が、御物忌やら何やらでなかなかそれを殿に御目にかけることが出来ないでいるらしかった。一方、頭の君は頭の君で、こちらの返事のいつまでもないのをしきりに怨<sup>うら</sup>んでいらっしやるらしかった。仲に立って、道綱は一人でほとんど困っていた。ようやく殿の御返事のあったのを見ると、「おれがどうしてそんなことをまだ許すものか。そのうち考えて置こう、と右馬頭には言つて遣<sup>や</sup>っただけだ。返事はお前が好いように取<sup>とり</sup>做<sup>な</sup>せ。そんな姫のいることさえ誰もまだ知つてはいないくらいだのに、

もしそんな右馬頭でもそちらに通つたりしてみろ、お前  
がおかしく思われてもしようがないぞ」といかにも心外  
なことらしくおっしやって来られた。そんなことを言わ  
れれば、こちらだって腹が立つ。その腹いせのように、  
私はつい大人げなく頭の君にも「ちよつと殿のもとに使  
いを遣やりましたら、まるで唐土もろこしにでも行つたように長い  
ことかかつて、ようやく御返事をいただいて参りました。  
しかしそれを見ますと、ますます私には分かり兼ねるこ  
とばかりなので、何んとも返事のいたしようがございま  
せぬ」と手きびしい返事を書いてやった。そんな風にい

つになく腹を立てた後で、ふと気がつく、なんでもないことだろうと思っているうちに、急にすべてのことがなんだか思いもよらない方へ往ってしまいそうな危惧きぐが、そこには感じられないでもなかった。私はそれを感じずると、何がなし心の引き締まるような気もちがした。

——そんなこちらの冷めたい返事にも、私の惧おそれたとおり、頭の君はすこしもお懲こりにならず、それどころかかえって熱心に同じような御文をお寄こしになり出したのだった。もうそうになると、こちらではなるべくそれに取合わないようにしているよりしようがなかった。

ところが、三月になり、ある日の昼頃「右馬頭様がお出になりました」と言うことだった。突然だったのでびっくりしたが、私はすぐざわめき立った女房たちに「まあ静かにしてお出いで」とたしなめ、それを取次いだものには「好いから、いま、私たちは留守だとお答えなさい」と言いつけた。

が、そうこうしているうちに、一人の品のいい青年が中庭からお這はい入りになっていらしって、目の疎あらい籬まがきの前にお立ち止まりになられたのが簾みすごしに認められた。

練衣ねりぞを下に着て、柔かそうな直衣のうしをふんわりと掛け、太刀たちを佩はいたまま、紅色の扇のすこし乱れたのを手にもてあそんでいらしたが、ちようど風が立って、その冠かんむりの纓えいが心もち吹き上げられたのを、そのままになさりながら、じつとお立ちになって入らっしゃる様子はまるで絵に描かれたようだった。

「まあ綺麗きれいな方がいらっしゃること」奥の女房たちは、まだなんにも知らずに、裳もなども打ち解けた姿のまま、そんなことをささやき合って、簾すだれごしにその青年を見ようとしているらしかった。折から、その青年の纓えいを吹き

上げていた風が、其処まで届いて、急にその簾をうちそとへ吹き煽あおったものだから、簾のかげにいた女房どもはあれよと言って、それをおさえようとして騒ぎ出していった。おそらくその青年に、そのしどけない姿を残らず見られたろうと思って、私は死ぬほど羞はずかしい思いをして

ゆうべ夜更けて帰ってきた道綱がまだ寐ねっていたので、それを起しに往ゆっている間の、それは出来事だった。道綱はやっとそのとき起きて来て、「生憎なげきようはみんな留守でして——」などと頭の君に言っていた。風がひど

く吹いていた日だったので、先刻から南面のみんなみおもて部のしとみをすっかり下ろさせてあったので、それがちようどいい口実になった。

頭の君はそれでも強いて縁に上がられて、「まあ、円座わろうだでも拝借して、しばらくここに坐らせて下さい」など言いながら、そこで道綱を相手にしばらく物語られていたが、「きようは日が好かったので、ほんの真似事にでもこうして居初いそめさせていただけました。これだけで帰るのはいかにも残念ですが——」と、すこし打ち萎しおれた様子で、お帰りになって往かれた。



「思ったよりも品の好きそうな御方だこと」そんなことを思いながら私は簾ごしにその後姿をいつまでも見送っていた。

それから二日ほどしてから、頭の君は私のところへ留守中にお伺いした詫びなどを言いがてら、「本当にあなた様にだけでもお目にかかって、わたくしの真実な気持ちをお訴えしたいのですが、自分の老いしやがれた声などどうしてお聞かせ出来よう、などといつも仰せられて私をお避けになるのは、それはほんの口実で、まだ私を

お許し下さらぬからだと思われます」などと怨んでよこし、「まあ、それはともかく、今夜あたりまた助すけにだけでもお目にかかりに参りましょう」と言ってきた。暮れ方、頭かんの君はお言葉どおりお見えになられた。しようがないので、ともかくもしとみ蔭を二間ほど押し上げ、縁に灯をともして、庇ひさしの間にお通しさせることにした。道綱が出て往って、「さあ、どうぞ」と言つて、妻戸をあけ、「こちらから——」と促すと、頭かんの君はそちらへちよつと歩みかけられたが、急に思い返したように後退あとがさつて、「お母あ様にここへはいるお許しを願つて下さいません

か」と小声で押問答していた。やがて道綱が私のところ  
に来て、それを取り次いだので「そんな端近くでも構い  
ませんでしたら——」と返事をさせた。頭の君はその返  
事を聞くと、少しお笑いになりながら、もの静かに衣きぬず  
れの音をさせて、妻戸からおはいりになって来られた。

ときおり向うの庇ひさしの間から、頭の君と道綱とが小声  
で取交わしている話し声に雑まじって、笏しやくに扇の打ちあた  
る音が微かすかに聞えてくる。私どものいる簾の中は、物音  
ひとつ立てず、しいんと静まり返っていた。それから稍やや  
あつて、頭の君はまた道綱に取り次がせて、私に「こな

いだはお目にかかれずに帰りましたので、またお伺い  
たしました」と言つてよこした。そうやって何度も間に  
立たされている道綱が「早く何んとか言つて上げません  
か」としきりに私を責めるので、私はしようことなく  
几帳きちょうの方へすこしいざり寄つては見たものの、もちろん、  
私の方から何も言い出すことはないので、そのまま無言  
でいた。頭の君はいざとなつて、私に何んと言つたらよ  
いのか、当惑なすつて入らつしやるような様子だった。  
なお、そのままにしていたら二人の間がいよいよ気づま  
りになつて行きそうだったので、自分がそこにいること

を頭の君があるいはまだお気づきにならないのかも知れぬと思つて自分がそうしたようにお取りになればいいと、私は少し咳せき払いをした。ようやつと頭の君は口を切つた。

志賀の里から誰にも知らさないようにしてこつそりと私のもとに引きとられた少女のことをひそかに聞き、その物語めいた身の上は何んと云うこともなしに心を惹ひかれているうちに、だんだんその未知の少女のことを心に沁しみて思いつめるようになったなりゆきを、最初は妙に取り繕つくろつたような声だったが、次第に熱を帯びた声に

なつて、頭の君は語り出されたのであつた。私はそういう頭の君の話をはじめから仕舞いまで、それに思いがけない好意さえもちながら、黙つて聞いていたが、ようやくそれを聞き畢り、おわこんどは自分が何か言わなければならぬ番になつたけれど、やはり何んとしても私は「何を申そうにもまだ姫は大へんおさな穉いので、そうおつしやられるとまるで夢みたいな気がいたすほどですから——」とお答えしているより外はなかつた。

それは雨が乱れがちに降っている暮れがただつた。あたり一めんを掩おほうように蛙の声が啼き渡つていた。その

まま夜が更けてゆくようなので、さつきから庇の間に坐られたぎり、一向お帰りなさろうとする様子も見えない頭の君に向い、「こんなに蛙が啼いて、こうして奥の方にいる私どもでさえ何んだか心細いくらいですのに。あなた様も早くお帰りになっては」と私は半ばいたわるように、半ばたしなめるように言った。

頭の君の方では、そういう私の言葉をもかえって身に沁しむようにして、ただ「そういうお心細いような折こそ、どうぞこれからは私を頼りになすって戴いたきたいものです。そんなものなんぞ、私は少しもこわがりはい

たしませんから——」と応<sup>いら</sup>えるばかりで、いつまで立つてもお帰りなさろうとはしないように見えた。だんだん夜も更けて来るようだし、皆の手前もあるので私は一人で困ってしまったが、それぎり物も言わずにいと、とうとう頭の君はお帰りなさるらしい気配を見せて、「助<sup>すけ</sup>の君の御<sup>はらい</sup>祓<sup>はらい</sup>ももう間近かでお忙しいようですから、何か御用がなくなりになれば代りに私にお言いつけなすって下さい。これからはたびたびお伺いいたすつもりです」と言い残しながら、やっとお立ち上がりになった。

私は何気なしにその後姿を見ようと思って、ふと几帳



の垂れをかき分けながらかいま見をすると、いま、頭の君のいらしった縁の灯はもうさつきから消えていたらしかった。私の座の近くにはまだ灯がともっていたものだから、それには少しも気がつかずにいたのである。それではさつきから闇の中で黙って頭の君は私の影を御覧になつていたのかと驚いて、私はあまりと言えばあまりな頭の君を「まあ、お人の悪い。灯のお消えになつてい

のをおっしやりもしないで——」と鋭くたしなめるように言い放った。頭の君はしかし、それが聞えなかつたよ

うなふりをなすつて、黙つたまま立ち上がって往かれた。

私はその跡、自分の近くの灯をそむけて、薄暗いなか  
にひとりそのままじっと目をつむっていた。そして私は  
その目のうちらに、自分自身のこうしている姿を、つい  
いましがた頭の君に偷見ぬすみみせられていたでもあろうような  
影として、何んと云うこともなく蘇よみがえらせていた。それ  
は半ば老いて醜く、半ばまだどこやらに若いときの美し  
さを残していた。そうしているうちに、私がだんだん何  
とも云えず不安な、悔やしいような心もちに駈りやられ  
ていったのは、そういう自分の影がいつまでも自分の裡うち  
に消えずにいるためばかりではなかった。それはさつき

あんなに狼狽ろうばいを見せて頭の君をたしなめたときの、自身を裏切った、自分の嗶しゃがれた声はまだそこいらにそのままそっくりと漂っているような感じのし出して来たためだった。

私はそういう一見何んでもないように見えることのために、思いがけないほど自分の心が揺らぎ出しているのを、しようことなく揺らぐがままにさせていた。……

## その三

頭<sup>かん</sup>の君はそんなことがあつてからも、私がそれをそれほど苦にしていようとは夢にもお知りなさない風に、相変らず、何かと道綱のところに来られては、撫子のことで同じようなことのみ道綱を仲にして私に言ってお寄こしになっていた。

私も、さりげない風をして、「姫はまだ小さいから——」と同じような返事ばかり繰り返させていた。そ

れにちようど道綱がこんどの賀茂祭の御祓はらいには使者に立つことになっていたので、何かとその支度をしてやらなければならぬので、私はそれをいいことにその方ばかり心を向け出していた。自然、撫子のことやなんぞで何んのかのと私をお苦しめになられる、頭の君の上からは心をそらせがちだった。——頭の君も頭の君で、毎日のように、役所の往き帰りに道綱のところところに立ち寄り、来ては、何かと先輩らしく世話を焼きながら、御自身は御祓の果てる日を空むなしく待たれているらしかった。

ところがある日、道綱は、往来で犬の死骸しがいを見かけた

と言つて出先きから戻つて来た。そうやって、その身の穢けがれた上は、御祓の使者は辞さなければならなかつた。一方、道綱がそうして忌いみにこもり出すと、頭の君はこんどはまた役所の用事にかこつけては、前よりも一層繁々とお立ち寄りになり、いつまでも上がり込まれて、あれから頭の君がいくら入らしてもお会いしないことにしている私に何んともしてもう一度会えるような機会をお求めになつて入らつしやるらしかつた。

人の好い道綱は、そんな私達の楔くさびになつてゐるのを苦にして何かと責め好い私の方ばかりを責めるのだつ

た。そうになると、皆の手前も、私はあんまり自分だけが強情にしているように見えるのも何んだから、いつそのことなりゆきを自分でない他のものにすつかり任せるとうな気もちになって、道綱を再び殿のもとへ使いに遣<sup>や</sup>ることにした。ことによるとまた殿が前のようにそのことで何んとかかとか私をお意地めなさりはすまいかとも思われたが、そうされたらばされたでまたその時次第の気もちで頭の君の方へも今の自分には言われぬことも言われようと気構えしていたところ、殿はこんどはひどく御機嫌好さそうに、「そんなに右馬頭が熱心にいうのな

ら、八月頃にでも許してやると好い。それまで心変わりせぬようだったなら」などと言って寄こされた。それは思いがけなかったが、しかし八月頃と聞いて、私は何んとかくほっとした。まだその八月までにはだいぶ間がある、それまでに何かその殿の一言で決せられた運命から撫子をまぬがれしめるようなことがなぜか知ら起りそうな予覚が私にしないこともないからであった。

「八月まで待てとはまあ何んという待遠しさでしょう」頭の君もそれと同じような予覚からか、殿の御返事をお告げすると、あたかも私を怨むうらように言って来られた。



「せめて五月にでもなっただらと思っておりましたのに。

——せっかく私のところへ来かかっているように見える  
時ほととぎす鳥も、あんまり不運な私を厭いとうて、このまま立ち寄りもせず、私から去って往ってしまうような気がいた  
されてなりませぬ」しかし、どうして私にばかり頭の君  
はそう怨むようなことを言っただけか分からな  
いくらいである。

そのままその四月も半ばを過ぎた。

四月の末になり、  
橘たちばなの花の匂の立ちだしたある夜、

だいぶ更けてからだだったが、私は自分にいろいろのことを言つてよこされる頭の君を、不本意ながら撫子をそのうちお許しすると御約束した以上はそう素気なくばかりも出来ないもので、ともかくもお通しさせることにした。頭の君はこんどは、前とは打つて變つて、重々しい態度をして入らしつたが、二人ぎりになつたとき私に向つて言い出されたことは、しかしいつもと少しも變らない怨み言だつた。あんまりそのことばかり繰り返しておつしやるものだから、かえつてしまひにはそのおつしやつていることに最初ほどの熱意がないようにさえ——そして

ただそれでもって私を苦しめなさるためにのみ、私に向って繰り返してばかり入らっしやるようにも——私には思えたのだった。

「まあ、何んと思し召おほめして、そのことばかりおっしやるのでしょうね」と私はもうそれを打切らせようとして、

「何度も申しましたように、まだほんの子供で、どうやらまあその八月頃にでもなったら、初事ういごともあろうかと心待ちにされているくらいなのですから——」と、そんなことまでずばりと言った。

そう私に言われると、さすがに頭の君も二の句を継げ

なそうにしていられたが、

「でも、いくらお小さくとも、物語ぐらいはし合うものだと聞いておりますが——」としばらくして言い出された。

「姫はまだそんなことも出来そうもないほど、幼びているのです。誰にでも人見知りをしてしようがないくらいなのですからね」

私は簾みすごしに、だんだんしよ下げたようになって私の言葉を聞いていらっしやる頭の君を見透しながら、さらにすげなく言い続けていた。……

「そうおっしやられるのをこうして聞いておりますと、ただもう胸が一ぱいになってきて溜まりませぬ」そう言つて、頭の君はとうとう身もだえするようになりその場に顔を伏せた。

「なぜ、そう私にはつらくおあたりになるのでしょうか。まあ、そうまでおっしやられなくとも。——いいえ、もう私はなんだか自分で自分が分かりませぬ。せめて、その簾のなかへでも入れさせていただけましたら……」

だんだん興奮してきながら、何を言っているのだから自分にも分からないようなことを言い続けているように見

えた頭の君は、そのとき突嗟とっさに——どうしてもそう考え  
てやったとは思われぬほど突嗟に——ずかずかと簾の  
方に近づいて、それに手をかけそうにせられた。

私はそれまでそれを半ば目をつむるようにして聞いて  
いたが、いきなりそんなことをせられそうなのに気づく  
と、思わず後ずさりながら、突嗟にきつとなつて、「ま  
あ、簾に手をおかけになるなんて、何ということなさい  
います？」と声を立てた。同時に私はその簾の外側から、  
それに近づいた頭の君と一しよに縁先きに漂っていたに  
ちがいない橘の花の匂がさつと立ってくるのを認めた。

私はその句を認め出すと、急に自分の心もちに余裕が生  
じでもしたように、一層きびきびと、「夜更けて、いま  
頃になると、いつも余所よそではそんなことをなさるのでし  
ようけれど——」と言い足した。

そういう冷めたい、それなりにどことなく熱の籠こもった  
ような私の言葉が、思わず頭の君を、もう手をかけそう  
にしていた簾から飛びすさらせた。「そんな御あしらい  
しかなされまいとは夢にも思いませんでした」頭の君は  
そこに再び顔を伏せながら、「しばらくなりと簾のなか  
へ入れていただけたら、ただもうそれだけでよろしゅう

ございましたのに。もしこんなことで御気色けしきを悪くせられたようでしたら、重々お詫びいたしますから——」と詫びられていた。

私はそういう頭の君に更にお圧しかぶせるように「いくら私が年をとって、私のことを何んともお思いなさらずとも、簾の中へ御はいりなさろうというのは、まあ何んということですか。そのくらいのこと御わかりにならないあなた様でもありますまいに——」と言いつつ、いたが、そのままその場に居すくまれたようにして入らつしやる頭の君を見ると、さすがに少しお気の毒になつ



てきて、それから急に語気を落すようにしながら、「昼間、内裏うちなどに入らっしやるようなお積りで、ここにだつて入らっしやれませんか？」と半ば常談のように言い足した。

「それではあんまり苦しゅうございましょう」頭の君は、そういう最後の言葉をもほんの常談として受け取るだけの余裕もないほど、悄しよげ返って、そのままずうっと縁の方まですさつて往かれた。さっきの橘の花の匂はそちらから頭の君が簾の近くまで持ち込んで来たのにちがいはなかった。

私はふと、その一瞬前の何んとも云えず好かった花の匂を記憶の中から再びうつとりと蘇よみがえらせていた。それがそのまましばらく私を沈黙させていた。

頭の君はそういう私をすっかりもう自分のことを取り合おうとはしないのだと御とりになって、「何だかすっかり御気色をお悪くさせてしまいました。もう何もおっしやって下さらなければ、私は帰った方がよろしいのでしよう。——」

そう言って、頭の君は、さも私を怨むように爪つまはじきなどなさりながら、なおしばらく無言で控えて入らしつ

たが、頭の君がそうお思いになつておられるならそれでもいい、と私がさらに物を言わずにいたものだから、とうとう立ち上つて歸つて往かれるらしかつた。

ちようど月のない晩だつたから、私は松明<sup>まつ</sup>などお持たせするようにつけた。しかしそれさえ受け取ろうとなさらずに、頭の君は何かすねたように、橘の花の匂の立ちこめている戸外へお出になつて往かれた。

そうひどく気もちを拗<sup>こ</sup>じらせたようにしてお歸りになつたので、もう当分入らつしやらないかも知れないと思

つていたが、翌日になると、また頭の君は役所へ出がけに道綱のところへいつものように「御一しよに参りましよう」と誘いにきた。いそいで道綱が出仕の支度をして

いる間、すずり硯と紙とを乞うて、一筆認したため、それを私のもとに持って来させた。見ると、ひどく震えた手跡で、「前生の私にどんな罪過がありましたので、私はいまこうも苦しまなければならぬのでしよう。このままもつと苦しめられるようでしたら、私はとても生きておられそうもありません。どこでも私を入れてくれるところがありましたら、山にでも、谷にでも。——しかし、もう何も

いいませぬ」と認めしたためられてあつた。

私はそんな頭の君のような若い御方のおっしやる苦し  
みなんぞはお口ほどのこともあるまいと思つたが、それ  
でもそのひどく震えたような手跡を見ていると、さすが  
に胸が一ぱいになつて来、いそいで筆を走らせて、「ま  
あ、そんな恐ろしいことをおっしやるものではありませ  
ん。あなた様がお怨みなさるべきは、この私ではないで  
はありますか。山のことも一向不案内なわたくし、ま  
して谷のことなどは——」と認めて、すぐ持たせてやつ  
た。

それからしばらくして、頭の君はいつものように道綱と一つ車で、役所に出かけて往ったようだった。

その夕方、頭の君は再び道綱と同車して帰って来られた。そうして私のところへまた、何かお認めになって寄こされた。こんどは見違えるばかりあざやか鮮な手跡で、「けさほどはたいへん取り乱したことを申し上げて恐れ入りました。仰せ下さいましたこと、しみじみ胸に沁しみましました。私はきょうは本当に生れ変わったような気がいたしております。これからは、もっと気をしっかりと持って、殿の仰せどおりにお待ちいたす決心をいたしました。た

だ、それまでは他に何んのなすこともなく、無聊ぶりようであり  
まする故、どうぞ縁の端にでもおりおり坐らせて置いて  
下さいませんか」と書かれていた。

まあ、そう急に神妙なお気もちになられたってそれが  
いつまで続くことやら。そうも思われたものだから、と  
もかくも今後を見ていようという気で、私はそれには差  
しさわりのないような返事しか差し上げなかった。その  
夜は頭の君もすぐお帰りになられたらしかかった。

そんなことがあってからしばらくは、頭の君も何かと

遠慮がちになされて、私たちのところへも余りお立ち寄りにはならなくなった。ただ隙ひまさえあれば、道綱を呼びにお寄こしになって、別に為事しごともないのにいつまでもお手放しにならなかった。それにはさすがの道綱もほとんど困っているらしかった。

私も私で、撫子なでしこなどを相手に、再び昔に返ったような無聊な日々を迎え出していた。昔に返ったようなの？

——しかし、それらの日々は私にとって、前よりかもっと無聊で、もっと重くろしいところのあるのを認めない訣わけにはいかなかつた。私はそれをば撫子にも話して置



かなければならないことをまだ話していないことの所為せいにしていた。どうせいつか話さなければならぬのなら——と思ひながらも、撫子のまだ余りに子供じみた身体つきや、もううすうす頭の君の求婚のことを勘づいていて、私からそれを聞かされるのをそれとなく避けておるとしか思えない折々の羞はずかしそうな様子だのを見ると、私にはどうしてもその話が持ち出せないのだった。

そういう撫子の羞かしそうな姿が氣になつてならない時など、どうかして縁の方から橘の花の重たい匂におが立つて来たりすると、いつかその簾のそとに打ち萎しおれていた、

若い頭の君のあでやか艶な姿が、ふいと私には苦しいほどはつきりとおもかげ倂おもかげに立ったりするのだった。……

そんなある日の事、思いがけず道綱が殿の久しく絶えていた御消息を私のところに持って来た。何事かと思つて、私はいそいでひら披ひらいて見た。「この頃よく右馬頭がそちらへ参るそうなの。八月まで待たせなさいと言つてあるのに。人の噂によると、なんでもお前が右馬頭を派は手でにもてなしてやっているそうではないか。お前に会えるのだったら、怨みの一言も言つてやりたいものだ」

その消息を手にしたまま、余りのことにしばらく私は空けたようにさえなっていた。こんなことを、あの気位の高い殿がよくもまあ私になどおっしやって来られたものだ。事もあろうに、あんなお若い頭の君のことで私をお疑ぐりなさるなんて。——そう思うと、何より先きに、ひとりでに苦笑とも冷笑ともつかないようなものが私の胸の裡うちにおさえ兼ねたように込み上げて来た。その一方、何とも云えず悔やしいような気もちもしないではいられなかつた。……

そうやってその消息を手から離しもしないで、しばらく

く空けたようになっていた私は、やっと気を変えて、ともかくも早速殿に何んとか返事を差し上げなければならぬと思った。が、何を書いても、誰が誰に向って書いても同じような弁疏いいわけめいたことしか書けそうもなかった。そんなことぐらいでこちらの心をお疑ぐりになるのをかえって殿にお怨み申したい——そう自分でありたいと思うような気もちには、しかしどうしても今の私はなれなくなっていた。自分の心がすでに殿からはこんなにも離れてしまっているのかと思って、私はみずから驚いたくらいだった。

私はそのまま悔やしそうに、その殿の手紙の裏に何んと云うこともなしに散らし書きをし出していた。こういう今の自分の何もかもを引括ひっくるめて自嘲したいような気もちにしかなれず。――

いまさらにいかなる駒かなつくべき

すさめぬ草とのがれにし身を

私は殿には返事を差し上げる代りに、そんな歌だけ書いてお送りすることにした。それを道綱に持たせてやつ

た後も、しかし私はいつまでも自分の裡に何物に対するともつかない、果てしない不満のようなものが残っているのをどうしようもなかった。……

頭の君はこの頃も相変わらず、何かと言っては道綱を呼びに寄こしたり、また遠慮がちに道綱のところに御自身でも入らしつたりなすっているらしい。頭の君はこんなことは何も御存知ないのだから、別にかれこれ言うこともないので、私はそのまま勝手にさせておいた。そのうち五月になった。時ほととぎす鳥がいつになくよく啼いた。昼間からこんなに啼くことも珍らしい。廁かわやにはいつてい

て、ほととぎすの啼き声を聞くのは悪い前兆だといって昔から人々が忌むらしいが、私はしばしばそれをすら空けたように聞くがままになっていた。……

いつか世の中は長雨ながさめにはいり出していた。十日たっても、二十日たっても、それは小止みおやもなしに降りつづいていた。

ある夜など、雨のためにひさしく音信おとずれのなかつた頭の君から突然道綱のもとに「雨が小止みになったら、ちよつと入らしって下さい、是非お会いしたいことがあります

すから。どうぞお母あ様には、自分の宿世すくせが思い知られました故何も申し上げませぬ、とお言付ことづけください」などと、何を思ったのか、書いて寄こされた。——そこで道綱が何やら気になるような様子で、雨の中をわざわざ訪ねてゆくと、別に何の用事もなかったらしく、ただ頭の君に人懐きそうにもてなされ、女絵など一しよに見ながら常談を言い合つて、夜遅く再び雨に濡れて帰つて来た。

撫子の方も撫子で、この頃は何か鬱ふさいだようにしている。日ねもす、閉じ籠かこつたまま、琴などを物憂ものそうに掻かき撫なでたり、そうかと思うと急に止めたりして、少しい



らいらしたようにして暮らしている。——こういう物忌ものいみがちな長雨頃の、そういう若い人たちの、どこへも持つてゆき場のない、じつとしていたくともじつとしていられないような気もちは私にもよく分かっていた。そればかりではなかった。私は絶えてここ数年というもの感じたことのなかった、そういうどこへも持つてゆき場のなような気もちを、撫子なんぞのために思いがけず蘇らされたようで、——しかし、今の私にはその昔日の堪え難さそのものさえ、それと一しよにそれが自分の裡に蘇らせるもののためにか、かえって不思議になつかしい気

のするものだった。私はそういう心もちに誘われるがまま、一人きりで端近くに出ては、雨にけぶった植込みなどをぼんやりと見入っていたりすることが多かった。まだ殿もお通いにならなかつたような若い頃、よく自分がそうやっていたように……

そんな長雨のつづいている間の、すこし晴れて、どことなく薄月のさしているような晩だった。

きようはひさしぶりの雨間あままに、さつきから頭の君が道綱のところに来ていられたようだったが、そのうち知ら

ない間に一人でこちらへ入らしってしまわれた。そうしていつもの縁の端に坐られて、例の撫子のこと、いつまでもこうして一人でいなければならぬ苦しきななどを、何かと私にお訴えになり出した。「もうあとの三月みつきばかりなど、すぐ立ってしましましょう」私はいつもの冷やかな、突っ放すような調子で言った。

「それがかえって中途半端で、この頃私にはますます苦しいのでございます」頭の君はそれには構わずに、自分の言おうとすることは押し切っても言ってしまったわれようとすするように言い続けられた。「御約束下さった日は、

あともう三月と申せば、向うに見えているも同然なものではございますが、それでいてこのままただ今のよう  
空しく待たされておりますと、どうもそれに一日一日  
と近づいて往かねばならぬのがいかにもまだる緩く、もどか  
しくて、かえってそれに近づけば近づくほどその日が遠  
のくように思われてなりません。もういよいよと言うと  
ころまで待っても、私はそのとき自分がこのどうにもな  
らない堪えがたさのためにどうかしてしまいはせぬかと  
不安で溜たまらないのです。どうか私からその不安を取り除  
くように、何とかお計らい下さいませんでしようか」だ

んだん哀訴するような調子になって来ていた。

そうなればなるほど、私はますます取り合わないよう  
に、「まさか私に殿の御曆の中を裁ち切つて、すぐ八月  
が出るように、つないでくれとおっしゃるのではないで  
しょうね？」と思わず笑いを立てながら言ったりした。

頭の君はしかし、にこりともなさらずに、簾みすの方をじ  
っと見つめて入らした。そのため、私はその簾の中に  
自分の立てた笑いがいつまでも空虚うつろにひびいているよう  
な気もちになったほどだった。私はそのときふいと殿の  
御手紙の事を思い出しながら、「それは御無理なことで

す。それに、この頃は殿にもこちらから御催促しにくいような事情になりました……」

「それはまた、どうなすったのですか？」 頭の君は心もち縁からいざり寄られた。

これはまだ言うのではなかった、と思ったけれど、私はすぐまた、そう、いつそのことは早くお知らせしておいた方がよくはないかしら、とも思い直して見るのだった。しかし自分の口からはさすがに言い出しにくいので、その殿から寄こされた御文をそのまま、頭の君にお見せしたくないところだけ破り取って、「これを御覧な

すって下さいまし。御目にかけてもしようのないものですけれど、まあ、これで殿に催促しにくい訣わけがお分かりになるでしょうから——」と言いながら、簾の下から差し出した。

頭の君はそれを手にせられると、ずうっと縁の先まで滑すべり出して往かれて、微かすかに差している月あかりにすかしながら、それをいつまでも見入っいていられた。

そうやってながいこと見て入らいした後、頭の君は何やら口籠りながらそれを簾の下から、こちらへ差し入れられた。それからやっつと聞えるか聞えないほどの声で、

「御料紙の色さえわかり兼ねますくらいで、せつかくな  
がら何んとも読めませんでした」と言つて、再び縁の方  
へすさつて往かれた。

私は頭の君に巧みにすかさされたような気がして、「い  
いえ、こんなものはもう破いてしまえますから——」と  
悔やしそうに言ったものの、しかしそれにはすぐに手を  
出そうともしなかつた。

頭の君が縁の方から再び言われた。「どうぞお破りに  
だけはならないで下さいまし。昼間、もう一度、拝見さ  
せて戴きとうございます」どこまでもそれが読めなかつ



たような御様子をなさろうとして入らっしやるらしかった。それからそのまま頭の君は無言でお控えになっっておられるかと思っっていたら、一人で何を口ずさんで入らっしやるのだから分からないようなことを口ずさんで入らっした。……

「あすは役所の方へは助すけの君に代りに往むかっひいていただいで、私はこちらへもう一度、それを拜見に参りますから——」頭の君がそう言い残されて、そこを立ち去って往かれたのは、それから間もなくのことだった。

その跡で、私は半ば気の抜けたように、そこの簾の下

に差し入れられたままになっている殿の御文を破ろうとするのでもなく、手に取って見ると、まあ何としたことか、私は頭の君に御目にかけてくはないと思って破ったところを反対にあの方に御目にかけてしまっていたのだった。その上、誤って御目にかけて紙の端が半分ほどさらに引きもがれているのに気がついた。私にはすぐ、あの薄月の微かに差ししている縁先きで頭の君が帰りぎわに何かしきりに口ずさまれて入らした姿が思い出された。

私はその頭の子に見られた紙片のちようど裏あたり  
に、あるとき自分で自分を嘲けるように一ぱいに散らし

書きをしたままであつたのを、それまで忘れともなく忘れていたのだつた。——「いまさらにいかなる駒かなつくべき……」

私はふと口を衝いて出たその文句が自分の胸を一ぱいにするがままにさせながら、なぜかしら、撫子の悲しい目まなざしを空くうに浮べ出していた。いまにも私に物を言いかけそうにして、しかしすぐに何んにも言うまいと諦めてしまふような、撫子のしおらしい目ざしが、それまでついでそんなことはなかったのに、その夜にかぎって私の目のあたりからいつまでも離れなかった。

## その四

その翌朝、頭かんの君は道綱のところへ使いの者に、風邪かぜ気味で役所へ出られそうもありませんからちよつとお出がけにでもお立ち寄り下さい、とことづけて来させた。ゆうべの出来事を少しも知らない道綱は、また例のことかと思つたらしく、いつまでも出仕の支度をぐずぐずしている、再び使いの者が来て、お待ち兼ねのようですからどうぞ早く入らしって下さいませ、としきりに催促

しているらしかった。何んの用があるのか分からなかったけれど、何か私にも気がかりでないこともなかった。

が、そのとき頭の君は私の方へも別に御文を持ってよこされたのだった。披ひらいて見ると、「風邪気味で、せつかくゆうべ御約束したものを拝見に伺えず、なんとも残念でなりません。私なんぞには忖度そんたくいたし兼ねますことながら、何か殿にわざと御催促なさりにくいような御事情がおりなさいますなら、然るべき折を見てなりと、よいように御取りなし下さいまし。この日頃、われとわが身が不安になるほど何が何やら分からず思い乱れてお

るような私の気もちをも御推量下すつて」といつもに似ず乱雑な、読みにくいほどな手跡で、したた認められてあつた。

私はいろいろ考えあぐねた末、それに対する返事はそのまま出さずに置いた。

しかし、あくる日になつてから、やつぱりそれぎり返事を差し上げないのは、かえつてこちらで何んだかこだわっているようで、若々しい遣り方やではないかと私は考え直して、いかにも何気なさそうに返事をすることにし

た。

「きのうはこちらに物忌などいたす者がございました、御返事もつい書けずにしまいました。そのことをどうぞ川水の淀みよどでもしたかのように、心あつてかなんぞとはお思いにならないで下さいまし。殿へはこちらからは使いをやるよすがさえないのが、御存知のとおり、今のわたくしの果敢はかない身の上。——御文の紙のいろは、昼間御覧なすつても、同じように覚束おぼつかのうございましょうとも」

夕方、その文を頭の君のもとへ届けに往った使いの者

は、先方に法師姿をしたものがおおぜい集ってごった返していたので、ただ、それを置いて参りましたと言つて戻つて来た。

まだ風邪気味で寐ていらつしやるらしい頭の君から「きのうは法師共がおおぜい参つておりました上、日も暮れてからお使いの方が見えられましたので——」などと言いわけがましく書いてよこされたのは、その翌日になつてからだった。「——ここ数日、どうしたのか私の庭を離れず、一羽のほととぎすが卯の花の蔭などでしきりに啼き立てておりますが、こうして日ごと一人きりで



歎き明かしてばかりおる私にすっかりなつきでもしたと  
見えます。

なげきつつ明し暮らせばほととぎす

この卯の花のかげに啼きつつ

まあ、一体、私はこのほととぎすと共にどうなること  
でしようかしら」

いかにも何事もなげながら、どこことなくお心のうめき  
をお洩らしになって入らっしゃる、そのような御文を讀

み返しているうちに、私はつい知らず識らずの裡うちに、苦しんでいるのが相手の方であるときいつも自分の内をひとりでに充たしてくる、一種言うに言われぬ安らかさを味い出している自分自身を見出さずにはいられなかつた。……

それから数日後、突然、おじ君にあたられる左京頭さきようのかみがお亡なくなりになられたので、頭の君もその喪に服せねばならなくなり、殿の御約束せられた八月を前にして、私どもに心を残されながら、しばらくその病後の御身を山寺へお籠こもりになられ出した。山からは、最初のうちは

絶えず御消息をおよこしになられた。それは相変らず独居の淋しさと撫子を求める切なる希ねがいとに充たされていた。しかし私はその頭の君の御文のなかの独居の淋しさをお訴えなさる御言葉がなんとも言えず切実に身にしみて覚えられれば覚えられるほど、一方、撫子をお求めになられる同じ文中の御言葉が、なぜか知ら、いよいよ空疎くうそなものに見えて来るのに気がつかないわけには往かなかつた。おそらくそれにはただ私だけが気がついているのだということも自分には分かっていた。それが一層私を身じろぎもできないような苦しい心もちにさせていた。

そのうちにそんな頭の君の御文がだんだん途絶えがちになつて来るようなのに、私が気がつくかつかないうちに、突然、それが絶えてしまった。絶えてから、私ははじめてこうなるだろうことを前から何んとはなしに予知していたような気さえしたのだった。しかし頭の君が山を下りられたらしいお噂はついぞまだ聞かなかつた。

.....

私はこの日記を仕舞わないうちに、もう一と言付け加

えておきたいと思う。左京頭の喪のために山に籠られた  
ぎり、そのまま行方知れずのようになられていた頭の君  
が、実はいつの間<sup>くら</sup>にやら他人の妻を偷<sup>ぬす</sup>まれてどこぞへこ  
っそりとお姿を暗<sup>くら</sup>ましてしまわれたのであるということ  
が分かったのは、もう七月もなかばを過ぎてからだった。  
そのことを知った当初は、あまりといえはあまりな出来  
事に心が擾<sup>みだ</sup>れて、そういう頭の君に対する思いがけない  
ほどのはげしい憤りやら、自分のしたことに対する悔い  
やらを感じずにはいられなかったが、ようやくいつもの  
落着いた自分に立ち返った今はもう、何やら自分でもわ

けの分からぬ身の切なさを除いては、私の気もちも割合に静かになっている。

女房たちはそんな私に向って言うのだった。「もう御約束の日も間近かになっておりましたのに、あれほど御執心なすって入らした姫君を措おいて、あの方としたことが、まあ何んということなすったのでございませうね。本当にあまりといえばあんまりな……」私はそういう人々のおなじ繰り返しのような慰めの言葉はどうも無関心に聞き流しているよりしようがなかった。

が、そういう頭の君のこんどの唐突な振舞も、少くと

もいまの私にだけは、そうなさるべくあの方を余儀なくせしめたようなお心の動きの全然分らないこともないような気がする。否、むしろ、もうほとんど手に入れられるばかりになっていた撫子をいつまでもあの方に限りなく遠いところにあるかのように思わせ、あの方のお気もちをわざと焦らし抜いて、御自分で御自分がもう何を欲していらっしやるのかさえ見分けられないようにおさせして、とうとうこんな思いがけないような結果にならせてしまったのは、この日頃の私、——いつの頃からか男という男のあらゆる運命に対してともすれば皮肉にな

りがちな、しかもそんな自分を自分でどうしようもな  
い、この私の所為せいだったのではなからうか。そんな気に  
も私はどうかすると兼ねないのだった。……

そういう一抹いちまつの不安のないこともない私に、道綱が何  
かそわそわとして黙って一通の文を届けてくれたのは、  
ちようどきのうのことである。まあ、おめずらしい、殿  
の、と思つたら、それは思いがけず頭の君のだった。し  
かし、道綱の手前、何気なさそうにして手にとって見る  
と、「本当にわれながら浅ましい姿になり果てました。  
いくら心にもないことだと私が申しましても、お聞き入



れにはなさいますまい。こんなどうしようもない羽目にならない先きに、どうしてももう一度なりとあなた様のお目にかかってしみじみとお語らいしなかつたのだらうと、悔やまれてなりませぬ。——」

そのあとに何やら歌のようなものが書かれてあつて、その上が墨で消されてあつた。私はその一部分を辛うじて判読した。「……をしむはきみが名……」

私はつとめて冷めたい顔をしたまま、その紙を徐かに巻き出していた。道綱は私の前に据わつたまま、別にその文を見たくもなさそうにしていた。そしてしばらく、

二人は何んとも言わずにいた。しかし、そのながい沈黙は、私にとっては、何か心いちめん<sup>ひ</sup>に張りつめていた薄氷<sup>うすらひ</sup>がひとりでに干<sup>ひ</sup>われるような、うすら寒い、なんとも云えず切ない気もちのするものだった。……





日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館